

5－3 春の女人講行事「麦丸の子安ビシャ」

蕨 由美

1. はじめに

八千代市麦丸地区では、今も春の女人講行事として「麦丸の子安ビシャ」が行われている。「ビシャ」は、「ヤド」と称する当番の交代を行う「オトウワタシ」を行う年一回の行事で、麦丸地区で毎年3月17日に行われるこの民俗行事は、女性だけが集まることから、「オンナビシャ」ともいわれる。

かつては毎月17日、またはヤドの都合で決められるその前後の日に「子安講」が行われていたが、十年位前に子安講は行われなくなり、現在は3月17日のビシャの儀式をとまなう子安ビシャのみが毎年続けられている。

本稿では、2016年3月17日午後、女性会員3名（蕨由美・中島和子・鈴木千代）が取材した八千代市麦丸地区の子安講の民俗行事である子安ビシャについて報告する。



1 麦丸の子安ビシャ（東福院やすらぎの家にて）

2. 麦丸の子安ビシャの準備と用いられるもの

3月17日の午後2時前に、東福院境内の麦丸地区の施設「やすらぎの家」にお伺いすると、広間に女性約30名が参加し、卓上にはお茶とお菓子、漬物などが用意されていた。以前は、嫁が来て姑になると子安講を抜けて念仏講に入っていくので、子育て世代の講であったが、念仏講が解散してからは、少子高齢化の影響もあってその上の世代が多く、91歳の方もおられた。会費は一世帯500円を負担すること。

広間の舞台の黒板には、「子安大明神」の掛け軸が掛けられ、その前には、蓬萊、灯明、七つの具の入った神饌、御神酒と杯が供えられてあった。これらの準備は、今年と昨年・一昨年のヤドと、それをお手伝いする「ハタラキ」の数名が行う。

子安講の本尊は、「奉納子安大明神／文化拾五寅歳（1818）二月吉日／願主 八郎左エ門／同 太郎兵衛／村講中」の銘のある美しく描かれた「子安大明神」像の掛け軸で、その主尊は、右手で着物を着た乳児を抱いて乳を含ませ、左手に未敷蓮華を持ち、右横を向いて、苔の生じた岩の上に左足を立てた半跏坐をとり、その頭部には光輪がめぐる。二百年間、子安講で伝えられてきたこの掛け軸は、赤・朱・濃緑の彩色も鮮やかに残っていて保存状態もよく、八千代市内だけでなく千葉県下でもまれにみる貴重な文化財であった。



2 本尊の「子安大明神」像の掛け軸



3 「子安さま」の祠に花を供える



4 灯明・神饌・蓬莱・おひねり・お神酒・奉納品



5 神饌「かみさまへのご御馳走」

蓬菜は、丸盆の盛り米に、梅の枝と松と笹を挿し、鶴亀を飾り、紙を折って小銭を包んだおひねりと折鶴を添える。

その横に灯明として、3cm ほどの短い小ろうそく 4 本と、10cm ほどの長いろうそくを立てる。小ろうそくは燃え尽きる前に消し、この燃えさしの小ろうそくは消えるまでの短い時間にお産が済むと伝えられているので、お産が近い妊産婦か、その家の者がもらって帰る。

神饌は、蓋つきの塗りものの中に、お頭付の魚・芋の天ぷら・はんぺん・ちくわ・さつま揚げ・こんにゃくの煮しめ・きんぴらごぼうの「七つの具」が入った「かみさまへのご馳走」である。かつては参加者の昼食のご馳走として、お赤飯・煮物・和え物・お新香などを用意していたとのこと。その準備が大変なので、今は家で昼食を済ませてから集まり、食事の支度は省略されたが、かみさまのご馳走だけはヤドが用意する。

そのほか、お産があった家からは、子供の名を入れた熨斗付の Karton 入りの飲み物などが奉納され、舞台に飾られてあった。

また、子安ビシャが始まる前に、ヤドは、東福院境内の子安講の祠に花を手向ける。この祠には、文化 7 年（1811）建立の「子安大明神」銘の石祠をはじめ、明治・大正の優雅な子安像塔が祀られている。

3. 麦丸の子安ビシャの儀式的流れ

子安ビシャの儀式は、まずヤドがろうそくに火を灯し、全員正面を向いて、「ハナミ」を歌う。ハナミは八千代市内の旧村の子安講や念仏講の女性たちが「祝いの席」で歌う祝い唄で、かつて私が取材した高津新田では「ハツセ」、高津では「ハナミ」と称していた。（高津新田のハツセの歌詞は注 1 の P46、高津のハナミの歌詞は注 2 の P46 に掲載）

麦丸では、個人のノートを用いる方もいるが、多くは、かな書きした歌詞をワープロで清書して平成 19 年（2007）に印刷した『花見帳』を見ながら、語尾を長く伸ばすゆったりした節回しで歌う。各地区の子安講とほぼ共通している歌詞であるが、口伝えで伝承されるので、意味がとりにくい箇所は「めれたやな（＝めでたやな）」、「かそわれもおして（＝誘われ申して）」と微妙に変化した歌詞で、記録として貴重である。

この日は「めれたやなこれのおざしき」「ともだちにかそわれもおして」「これさまのおかみさまわ」の子安講のハナミに加えて、子安ビシャの際に歌う「おとわたし」が加えられる。

オトウワタシの儀式は、「おとわたし」のハナミの後、今年と来年のヤドが前に出て向かい合って座り、お神酒を盃に注いで今年のヤドが飲み干し、次に新しいヤドがその盃を受けて飲み干す。このお神酒は、参加者一同にも配られて、オトウワタシは終了する。その後は、一時間ほど歓談し、「おつもり」のハナミを唱和して、お開きになった。



6 灯明



7 『花見帳』表紙



8 オトウワタシ

4. 子安ビシャでの聞き書き

歓談の際に、参加した方々に子安講やハナミ、安産信仰などについてお聞きした。

子安講についての戦前の記憶は薄らいでいるので、どのヤドの家も母と子でにぎやかだったという幼少時の思い出しか語られないが、戦後の 1970 年代の第二次ベビーブームのころはとても盛んで、広間に入りきれないほどの人でいっぱいだったという。

1960 年代までは結婚式も家で行われ、嫁の家で宴会してから、婚家で宴会とお披露目、その次の日は「ハタラキ」の人へのふるまいと続き、その都度ハナミを歌いに行く。結婚式でのハナミは「嫁さん」（「おかどからおよめのりこむ おにわあかしのたえまつで・・・」）や、婿取りでは「もこさん」（「おかどからわかしゆのりこむ・・・」）を歌った。また、子が生まれると「みつめ」（「これさまのおまごさまわ・・・」）を、三月と五月の節句や七五三でもそれぞれハナミの祝い唄を歌いに行った。

お産や特に難産には、東福院北隣の Y 崎家（屋号「ミセ」）の氏神である「子の神さま」がご利益があり、毎月戌の日には安産祈願にお参りする人が多く、特に念仏講の人は熱心で、孫ができるとお菓子などを奉納していたという。

5. まとめ

毎年 3 月 17 日に行われる麦丸の「子安ビシャ」は、十年位前まで毎月行われていた子安講のうち、年一回の「子安ビシャ」のみが続けられている女人講の行事であるが、「子安大明神」の掛け軸と共に、安産祈願の灯明などの子安講の信仰形態がよく傳承されている。

ご馳走の用意などは、数年前からはかなり省略されてはいるが、「ハナミ」の唱和⇒新旧のヤド（当番）が盃を交わす「オトウワタシ」⇒宴会⇒「おつもり」の唱和などの儀礼と、新旧のヤドとそれを助ける「ハタラキ」による行事の執行体制も保たれていた。

現代の少子化と生活の近代化や旧村の過疎化の中で、北総の子安講は過去のものとなりつつあるが、麦丸の子安ビシャは、「子安大明神」の掛け軸、ハナミを伝承する『花見帳』とともに貴重な民俗文化財であり、今後も大事に伝えられるようお願いしたい。

資料 麦丸の「子安ビシャ」のハナミ

（出典『花見帳』平成19年5月麦丸区）

- 一、めれたやな これのおざしき
ところよろこぶ はばをとる
なにごとにかきとるよおに
ひとのもちえのあるよおに
- 二、ともだちにかそわれもおして
こやすごもりえまえりて
はなばなとまえりもおして
たからおさずけてたもおれ
- 五、これさまのおかみさまわ
こやすさまえみきさげて
まずはつわこやすさまえ
あとわおざえひろめべし

おとわたし

これさまのおかみさまわ こやすさまのとおりて

とうとりてもりやもうして おわたしもおしておめれたや

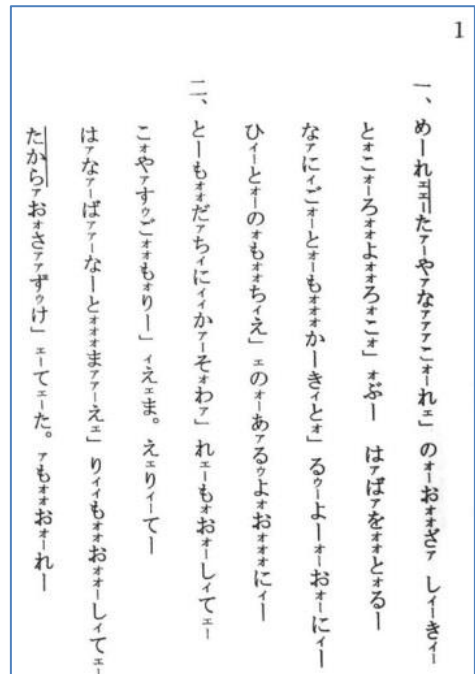
おつもり

十三、さかずきわおさめのさかづき おさめにはなをさかせて

つるかめわゆわいのものだよ つるとかめとのまいおさめ

十四、こんにちのおさかずきわ どれでおさめもおそおよ

たかさごのおのえのまつで せんしゆらくでまいおさめ



9 『花見帳』の歌詞

注 1. 蕨由美「民俗Ⅱ-かつての暮らしと習わしの記憶から」『史談八千代』第28号 八千代市郷土歴史研究会 2003年

2. 蕨由美「その2 高津の女人信仰の民俗 子安講・秩父参り・念仏講・観音堂」『史談八千代』第30号 八千代市郷土歴史研究会 2005年